源平拾遺

上

リ 5
931
1

門 9伊5
號 648 931
卷 1

源平拾遺序

[illegible]

つきくりて出生て戦の秘変伝くんとすると
かまにはさらしれりてあるひとりて赤紙ふうしを
くめとも北山殿義満とすると思ひすく
あるを源平拾遺と此二書の古い二ろうみ
中むりに平家拾遺源平雑記とをて
ろれとのあはとをもれ本うつろ拾遺
人のをつけりしいろひ中山の宮殿宮司
ひうろ藤井の大人あるを家にあるかたし
りろいうろうやうにをひ又有

かきあつしたるひとくろうくにさらおもひえ
ろへれとともにおあひきるうれをろの
ろをうつみ出くけるいひ出へるをつく
拾遺ろく見ゆくにふ国くの兵家名
流ふと峯けうけはかろくも故ふきを
りろあくうろをいはれ才の古とも
ろひくけるのろくおりせ時ろう神乃
こくいれあうしくふいまにはうし
ろけみてりへる中を好けを此大人ろ

らはるの宮人の世うり弟をいつきたつる
ものとの形にうけきくもかしこきに仏の作を
うみたてうるそうまふれ時に法をつみ社
のみ方民社事とうとてとそれらしうく
まれあしくと宮めたてふまともうれ兵士
をおりひいてうしてうの一たてひきとれ社く
うれい大うるのりれはうるまふうとを死
強人のお墨縄ら正しうをを注ものし
宗のなりあ人松の下法みうはとひく

りれうと人の多れいかうめつしに書をも
るうとへる形ううをおるしくハ猫なにうく
をうをれたううとるうとすをれる
い形に墨のいるみうまひてとうりも中れ
たうはぬををひしとの志ひてひり法り
らうくはうはられかはりをとひうふる
うれ形に墨の姓しうををきつうれいや
しきうとれひふちるれいひ出んまはつし
の本林乃はりううとを志ひて

思ひ出るまゝはるゝ事とうるゝ涙ぞ
みちうかはゝうゝ世つくはゝ天保にいとせと
いとゝ書らくゝ以ハ吉備の道ゝ口
岡山の産女庄園源四郎源徳

此書うたあゝはをれやゝうすゝ
ゝ事ゝと
寿永のころ平の家ゝ人ゝのあつまり
たゝうひの事ゝもくりゝかゝ書の今れ世にたぐゝそはやとハ
長門本あゝめ平家の物語源平盛衰記のふゝ書ゝとりゝ
りゝに此書ゝも変のりゝつゝ
らゝかゝ人ゝの云行ハきゝりゝたゝゝもあゝて
りゝゝに残まゝとハいゝうあれゝとゝ人ゝるゝかゝ世
りきゝゝぬもりゝゝくゝて八其人ゝのゝ人ゝ
ゝめいゝたゝひもゝりゝあんりゝがゝゝ思ひ出

このうちにもろひあはせてかくかの此書りなんけれども
源平拾遺と名ぜられ
○こゝ百年のむかしまでは源平の戦乃ろかくのごとくなる
とかゝれたる残りたるものあり書イはじめてこれをひろ
ひ人のをとりて見せけるその文はさて甲陽軍鑑などに似て
いまし人の雅文まじりにかきなされ漢文まじりにかゝれ
かゝるものにてつくりかへられたるものなるべし
こもまぎれをわろきさうだうすることしばらくてみたるを
さてはみやびなるものにあらずとまてこそ変にはれど高
尚ぶりたるこゝろにくからぬことなんひとつもあるべけれ見つけたるまゝに

家のひゑん書ものゝあるべく其書の名をえしるさず
○こゝにみやびなりうたをあつめしはいとたれどちかれたるものもあるべきを人も大
うるはしきこゝろえんをもれ初めかぶりぶりこの人のうたをさまざまにおもひ
こゝばいそぶるなどもしてあるべきをたゞ
うたはれば父のさとりなれば文集のこゝろすなるべし
○こゝにうしろ中文をうすげてかゝるは高尚ぶりたるものなるべ
はいぶかしきうづ人をもこゝはすなはち書よりたるものなるべし又兵書に
見えたることもいできたるべくこゝにいへる六韜三畧孫子呉子な
ほんさうだうぐさにはいたるものなれども此四つにはうたはほとんどなきを
をりたるみつるゆゑなるべきにもいれることはあるべ

[illegible]

子十三篇[illegible]事の[illegible]唐太宗の[illegible]の兵書[illegible]

見[illegible]孫武といづる[illegible]

思[illegible]

[illegible]兵書[illegible]

[illegible]

天保六年丙春

八九翁松齋大中臣藤井宿祢高尚

源平拾遺上巻目録

北條時政人を京へのぼして其ころの事

[illegible]見せ[illegible]

頼政に神輿[illegible]

[illegible]難[illegible]事

小松殿へ[illegible]景清申[illegible]

能登守教経入道相國をいるめ[illegible]事

景清軍陳の[illegible]能登守申[illegible]

頼政の三井寺[illegible]義経乃

こうくはぐえいくる事
頼政らの宇治の戦ありやうは又義経の
はぐめいくるやう
頼朝主はじめての戦に智謀はかりつる事
富士川の戦に頼朝主の謀はかりし事
同じ時に信義富士沼の水鳥にたてさせ
はる事
正月元日に頼朝主若宮へ参拜の事
義基がほろびくるゆゑ〳〵に實平
はぐめいくるやう

重忠人相を見る事
教経宗盛右大将をいさむるやう
横田河原の戦の事よりて實平のいくるやう
同じ戦の事に義経のいくふやう
又同じ戦の支度弁慶のいたるやう
頼朝主教に感じて實平に劔とらせふ事
實盛薩摩守に謀に申〳〵すむる事
くりかへしの日義仲謀に
平家木曽と戦とつて後義経のいくる事
太史坊覚明義仲に申に謀

頼朝と平氏ばうべんのこころえの事

北條時政人を京へのぼして其こころをはかる

ども見せしきせみちてゝることゝ

嘉應元年の春はるの時政天下のやゝとまぐさをあふ信義高綱の

ふたり武京へおぐゝく平家はたゝ見たる姿ふたり京のことども見

きくゝたゝ記きしてかゝる日記の中に二月廿八日ひえの山に

旗雲たつていとさはやかにぶよきもゝ物ゝんとゝ母との人ひたゝ又源

三位頼政ゞ武小松殿ゝこゞひ思ひたゝまることゞもかぶくたゝと

きゝ三月五日午の時ゝゝ易そうに空のゝたゝつくゝ日のむゝう

あゝくゝ紫色りあゝぬ泰親ぶゝちへるやゝに世のゝぶんん

志るしなりとぞきこえそのよし奏しけるに同十日の夜月入て後
将軍塚むなしくやまのうちひゞきわたりけり
おびたゞしく日ごろのうちにかくれば平家の物語などにも申しけ
事のありつるよしきこえけるはあれが中にわづかに
志るせるなどにはあるべからずとあれば見るにしるされたり世社中
こゝろ得んとするにはあやしき事どものなりゆきをみてなんまた頼政
は平家をほろぼさんと思ひたちしは世にしられたる
らんとおもふ旨はそのころわが吉備津宮よりしらせのたて
まつりきたる鉄のこしらへは承安元年辛卯源三位頼政奉
之といふをしるし見えわが大神は武将乃神なれば物だちたるの

願ありてたてまつりしなるらん嘉応は三年にて承安とかはら
せたまひしは同じころなればとくに世の人のしりたる小松殿は
かしこければはやく見しりてとゞめたまへる故なりとぞ頼
政はかく年久しくおもひつめ事なれど兵書の学びせら
し人なればかく謀つくるなくたゞひとあらはれずやはありけるを
られさる又時政のかゝりにとられたるなどいくさに出させんと
おもふことはかりしにこそしるしをもさせつるは六韜より
必見天殃又見人災乃可以謀といへるこゝろなればなり
頼政は神輿をふせぐにやゝ言ふく
いかく難とおぼれらまつると

山門ゟ三社の神輿ハ大内ゟ入れんとする時ゟ頼政ハ宗雷ゟ
人にいゝくんとかゝゝひあゝ多ら れまゝ ゝ
天地のけひゝ ゝ柔弱剛強ハ ゝ鉄石かゝ
ゝ火柔ハ ゝ ゝ山門の人ゝ罰あれゝ
ハ弱ハ ゝ ゝ
策を用ひ神輿ハ ゝ言ゝ此雖
頼政ハ三井寺ゟ ゝ宇治の
ゝ ゝ ゝ宗雷ハ謀
ゝ ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ柔能制剛弱能制強ゝ
ゝ ゝ ゝ又同書ゟ柔者徳也剛者賊也

弱者人之所助ゝ ゝ ゝ神ハ ゝ柔徳を
衆徒の剛ハ ゝ ゝ制ハ ゝ
ゝ ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ宗雷の ゝ
ゝ ゝ ゝ

小松殿へ ゝ景清の申ゝ

治承元年五月十六日の夜能登守教経小松殿へ ゝ
弥平兵衛宗清悪七兵衛景清二人も ゝ ゝ
臣殿へ申ゝ ゝ ゝ平氏の家ゝ
ぼ ゝ ゝ法皇ゝ ゝ

新大納言殿近くまゐりて兵衛佐に申さるゝ俊寛僧都西光法師あとをくまぐまの谷々捜どん法皇あとをとりく御幸行ときゝたるハ世にたぐひなのことふたつとなくゝ考へたる人と申しつゝ大臣きたりてみれば申ことまことに似くさ
ことにあらぬ成親兵衛佐とにつめたる谷々人々つどん法皇御幸にけるとこゝろ
ぬれども わが宮ハ ろぼ たるべき
妻ともはぐくみ
いとをしくすべきけること事ありとまことにいとく
あはれまことに政と正しく人をあはれまことしべくこと
さんどもあのくはちろもちひとりけうとんといとんとまゐ景

清つゝみて又申さるハのことくみくハけくはるべきことあれども
せきの東ハ頼朝あり其兵者どもをいづくよりかんてはけるゆく
へもしらぬ近る年ごろはけるものども御家とをしく
志はるばどうけたりまゐるるまハあるとうにあん思ひ
たりつゝ申しうどゆしぐ入ることとうどたぐゆるべくハ
あづかりやまべくハ法皇御所をうとたりひつ景清ハあるべ
ゆゝ宗清ハすゝしうちはひくくもみ御ゆ人ハまうどきぬ大臣
教経すゝひたりへるハはいくくとはまゝて宗清景清はまうう
はちくはのことあるくとゆしうはちはやとひたりへるかく人の人は
くはればくいくみとも申さまゐ

小松大臣の思ひさだめらるゝ所は法皇御所とうやまひあつかひなされ

たまへるは平家のなかにてはいとめづらし呉子にも安國家之道

先戒為寶といへれば さりながらも大臣としてかくのごとき人入道

相國にはかりしれし思ひさだめらるれば ゆく末は老べく景清はあくまでを

おしはかりてこそあづかれしは申しあらぶる者しと思ひける

されば中にも此人をこそ上はすぐれたる宗清のもとへしかはれし

はいかなる事かありけん思ひそめし教経のことをいれてはいかにも申

されぬは入道相國の事にかひなけんといふべくあるべし

能登守教経入道相國をいさめらるゝ事

治承三年十月十八日より平清盛入道相國一家の人々はいけどる家人の

ときなる事をもつて人々かなしひあはせられける大かたは法皇は鳥羽殿へう

つしたてまつり関白殿をば日向國へ公卿殿上人あまたられは何がしかれ

がし此國々へ遠流しけんといひつぐたまひしみなかくいふ人もなかり

しは教経すゝみ出て申されけるは故重盛左大将はよりかくらん

ことはのことなかれさまひならいましめられる大臣の官職の人流罪せしこと

左大臣曽我赤兄公より内大臣藤原伊周公よりいくるもわづか六人と聞ゆ

けるなりかゝるふかき罪はかつてなくなりましまして摂政関白殿を

なる御方を武家よりさめはべしやなどと申てられ見たてまつりて重

盛公なうしん後のことどもこゝろつかはさせたまへる文といぶしかれば入

道相國もかくてこそ思ひさだめける此みなくを此日のことのはどそへはや

[illegible]

[illegible]小松左大将うせたりしより年のこゝろもみいさむる人あるべきとて入道相國かくれたりとはさだめて思ひたちまゝ六韜に擅天下之利者則失天下といへるはこれなり重盛公は[illegible]教經朝臣のかくいさめられしはこれ平家の物語源平盛衰記などにかゝれたるとぞ[illegible]

[illegible]能登守は申さるゝ

景清軍陳のこゝろ[illegible]能登守は申さるゝ

教經朝臣ひとり景清は[illegible]弓はいかゝ足軽と先陳にたつゝみ敵近くうせ来たりたるとき時は矢をはげえびらを本陳よりぶれ[illegible]景清こゝ[illegible]足軽ど段々にたゝかはせ[illegible]弓ど射させ敵近くこゝ[illegible]ひきせ平地にゝゝ五段六段にぐ射させつゝ左右の足軽どもみな[illegible]のこゝたゝかべく中は騎馬のはゝの左右は足軽なすゝ[illegible]べ[illegible]鶴翼の備陳申ゝ[illegible]

景清は軍は法ともかくゝ[illegible]

なりけり

頼政父子乃三井寺をたつて南都へ赴く并義経の
しかくはかりごといへる事

佐々木四郎高綱九郎判官義経にむかひて高倉宮三井寺へ入らせたまひし時寺の衆徒三位入道殿にくみしてんとはかりけるにかくれもなきはいかゞにはしつらく待らんとおもひしかば義経のいふやう三井寺山のうへにあれバせめのぼる事かなふまじくかりそめにて六波羅のいくさをせくらぬやうに南都のうへりてしかきくぬしたりさば六波羅乃ほうを引三井寺にむかはせてそのはに頼政父子乃いくさにうちすぐれたるほうをの百騎ばかりにて二手にわけ一手ハ東山のふもとより九條のほとりにいださせ一手ハ北より七條朱雀へまはし東西より攻させなバたちまちに火を放ちて六波羅をやぶらんとするべしと志らせバたゞちにしたがはん頼政父子もうけがひしといへり

高尚考ふるに孫子に必居高陽以待敵といふを思ひ凡軍好高悪下といへるをたのみて三井寺にありてとりかへすべしとハいへるなり六波羅をせむるハこれも同書に攻其無備出其不意といへるところなりこれ孫子にあるべくとぞおもふとかく義経ハ鬼一法眼に兵書をひきて学びたるはひのことハ頼政父子もよくしりぬれバなりしゆゑにおそれてまよひへられけるにあさ瀬をわたるといふことにかくれたり見えてとかく

いくハかりとゝまりぶ[illegible]ハ[illegible]ちぶひしてはたらあさてまあん

頼政ゝの宇治乃戦ハ世ゝ以又義経の

けぐえいくるやう

佐藤次信義経ゝとひたゝゝ三位入道殿の宇治ハ戦ハ[illegible]

ゝとゝゝゝ戦ゝゝ南都ゝみちゆきゝゝゝんよハ橋板ゝと

しけるゝゝゝゝゝゝゝゝハ敵たゝの板ゝべゝゝハ木竹やうけるのと

ゝゝゝ来ゝべゝいゝゝてゝゝゝゝくゝゝんゝゝひゝゝ義経のゝくゝ

攻ゝゝ敵遠ゝゝゝしてゝちゆくゝも追ひゝゝゝゝんゝ思ゝ時ハ橋の

ゝゝに焼草をけゝくけゝゝやさゝゝ敵のゝゝゝ頼ゝゝゝん

ゝ思ゝゝゝゝにひゝゝ人数とゝて十死一生の戦をゝゝべゝゝち

ゆゝて利ゝゝめゝくハ橋ゝ火ゝけ速ゝゝちゆくべゝとゝゝ

高尚がゝをゝくハ敵のやゝゝゝたゝゝくハゝれゝかゝべゝ

ゝゝゝ橋ゝ火をけけゝゝゝの公二手よわけ三位入道殿父子

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝの大将ゝゝゝて一手ハ宮の御ゝも

てゝゝに世ちゆゝ一手ハ川ゝゝ一町ゝゝゝゝゝゝゝ

敵のゝゝゝゝゝてゝゝ陳のゝゝゝゝぬゝゝたゝんぞ

ゝゝゝゝゝゝゝ孫子ゝ今半渡而撃之利といひ呉子に

陳而未定ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ謀ゝ頼政ゝの川ゝゝにゝひ

陳ゝたゝハあやゝゝゝゝゝゝ兵法を知ゝれざゝゝゆゝよゝん

頼朝ゝけゝゝゝゝの戦ゝ智謀けゝつゝ事

治承四年八月六日頼朝をそむくべき戦ひ兼隆をうつべく
ゝゝ工藤介茂光土肥次郎實平岡崎四郎義実宇佐美三郎
助茂天野藤内遠景佐々木三郎盛綱加藤次景廉十人をぐして
で人ちゝぬきゝれめ〳〵てちゝゝ思ひ〳〵車ゝぶり〳〵ぐして紋
たちゝ思ふ〳〵といへれ〳〵ゝぞ

孫子ゝ兵者詭道也ゝいへるハぶけるゝゝみくちゝ頼
朝をのいゝ様つるゝいつゝゝなきどもおのれぐしてをなの
みゝゝふゝゝゝれもく思ひてはゝひゝゝみをのちゝゝゝゝう
めぐゝゝれ様ゝる

富士川の戦ひ頼朝をの様ゝゝ

ちゝゝ平家ゝはでめゝの戦なれバとゝ頼朝を遠江駿河のゝゝう
ゝかゝゝゝみもゝく人ゝ出ゝてゝむゝ様國ゝハみ様源氏ゝちゝ
ぐひゝゝゝちゝのはゝゝの貝とふせゝゝんゝみ野山ようゝ甲斐信
濃のはゝゝのぐゝハ平氏の軍れゝうゝゝかゝとんとするゝゝを
いゝゝめられきゝぞ

かゝれ様あゝゝを平氏のゝゝみをかゝてゝゝびくゝひ
ぐゝの國へ人ゝいぐゝゝくゝゝかゝゝゝのゝゝときゝゝゝれハ
そのゝゝゝハちゝれめぐゝゝゝ平氏の大将ゝちゝゝゝゝゝう
めゝゝぐむれたゝゝゝなんゝく源氏のゝハゝゝゝひのれ
めゝれゝゝゝふゝ平氏のゝハ實盛ゝぐゝゝゝゝゝゝみて

かくれをはらくすぐれたる侍にて候こと平家の物語り
見えたり〻〻多勇たぐひなる武士その士卒は少勢なれども
うくるり三畧ゆと無使辯士談説敵義とつくるたぐひ
同じ時は信義富士沼の水鳥をたゝき
はたゝき事
武田太郎信義ひとりにすぐれ水裏の上手〻〻平家は陳中の事は
さうせはたゝるものども源氏を恐れ〻〻はたゝいひの〻〻頼
朝まのみまえよりてたゝくはたゝと申す此沼より水鳥
かず〻〻ずりめく見えたるそれたゝせるぞ羽音よおと
ろきはたゝ敵の陳さまをめぐくさはたゝんとうはたゝ安くこそ

申されはたゝとはたゝはたゝるうてはたゝ弓引くそのはたゝうのぞその
ものども給つるなる矢うてむ〻〻く沼のうへはちひろ射ける
〻〻はたゝるるく乃水鳥はたゝるるふるう羽音はたゝ平氏は人〻〻敵の
きく夜はたゝはたゝ思ひたぐく大将小松維盛少将はたゝめは
はたゝはたゝるふ物はたゝのげのはたゝる
はたゝ信義はたゝうはたゝふ六韜は心怖可擊はたゝはたゝ又
因其驚駭者所以一擊耳也はたゝるゆはたゝいふはたゝ
うはたゝるゆはたゝ東の國はたゝはたゝものども頼朝はたゝれ
はたゝはたゝはたゝ源氏のはたゝはたゝはたゝはたゝはたゝの物
ふは維盛少将三畧は将無勇士卒恐はたゝはたゝはたゝはたゝ

されバ中にハ勇あるも数々ありつれど大将勇なきゆゑなり
みなおそれてにげしまでとりの罪ぞかし

正月元日に頼朝主若宮に参拝の事

治承四年十二月廿八日に頼朝主時政にむかひていはれけるやう故にいらん春
の元日ハ朝拝いふしく人の世にはじ諸のやしろの神事もすたれぬ
べけれバまた神のまもりもあらじとぞ思ふなりこの時にいはく
神社をかやまひおろそかになしたてまつるべからず元日にハ朝とく若宮に
まゐりをがむべしといはれけれバ三浦介義澄大庭平太景義畠山次郎
重忠におほせ夜ふかくちからをつくしせ道乃ほとりハ馬をとゞめ
でられける天の下おひなびく民ともかくいのりのためとて神馬を宇

佐奈三郎祐成新田四郎忠常におほせてひきせらるこの時にハ千葉
助が屋かたに入て人々をのぞみよろこびて伊勢熊野に奉幣
のつかひをおほせられき
かくやんごとなき事にふかく心をもちひられしハつくしたてまつ
そのころの天が下にハ又たぐひなき武将なりとぞいひける

義基がほろびしゆゑならびに實平
がぶめいへる事

武蔵権守義基平氏の将源太夫判官季貞にほろぼされ治承
五年二月九日にその首大路をわたされけるに鎌倉にきこえ
土肥次郎實平にて義基軍の時勢をしらざるをのゝしり河内ハ

平家のふところのうちはかくし そはうちにありてそむくはかれ
見えんなれハいふもたゞしからぬ佐々木三郎といひたるハからんとて
ハいかにしてもおのれらなどげすんといふ実平いへるハ軍乃道ハ
謀をもて本とす其の策ハあらハれ見えぬやうにすべし 兵法云将
謀もらるれ時ハ戦て利なしといへり義基智謀ありとのあらバ
すづからはみのまへうちくのちからをあらはしてこそハ平家はあさ
がひく時を待べしといへりき

此土肥氏のあるなり平家物語盛衰記などにハあらはしたらし
てハいさゝと見えざれども謀ハふかしかしこく世にすぐれたる
人なりぞけりなる此人のあげつらふことあたかもせりてはしべし

重忠人相を見る事

頼朝主ひそかに畠山重忠をめしてかたへの人をしりぞけて平家乃
諸将のことどもとひきかれける中に重忠宗盛右大将の相ハいやしく
眼つきして目尻りとの見頭ふるわく遠く見るは相なし此
主諸将にすぐれたる人相いとくわろしといへり

大将ハかならず人相ハ見るものなれバもすべきことならし毛利
元就の明智光秀を見てむほんの相ありとてしりぞけれ
しかを思ふべくなん

教経宗盛右大将がいさむる事

治承五年二月廿七日に宗盛右大将東北の国ぐにそむくといへどもまと

むらんとてつくりたるものなれば出でんとしたまふ日より入道
相國はなはだくるしきなやみもてなやまるる病と見えられぬれば
ひぬ能登殿教經申さるゝは今源氏のともがらなどうちかつぶしたま
へばいまだ後のわざうしなみはらへべしとぞ申せられける
相國公の御病はなほ重くなりたまふもかつは出陳したまひつゝ
おもはせまゐらせぬべうおぼえ近き國々はかたがたおさへ
ものどもはつかはしたやすくせたまひつゝ又のはかせもうるがふべし
うつぐ時々はうさぎなどを敵のつくるものをまうくはかりうち平家
もはら戰ひまはりけるいとゆゝしもうしふうべし御出陳しまゐらせと
いふ申されば右大將のいとうくしく親の病をなほざりに出でいふ

ふべしはやまゐらせおはしをのこそ神もあはれみまゐらせ源氏のともも
ばかりきのふまでは夷とかろしめあなどりしかども何ぞうの事か
はうんとはいとる教經なりとなどて申しまゐらせふ乃
道理にはいでたる日より家はわづかにはかはやをうちまはりまゐらせ
はまゐらせんは天の下をうるはる失ふう敵なりとぞおぼえまゐらせ
戰ひくたびまゐらせたまひあるべし平氏はかりなべし相國公はわ
くはなはだしくはかりうちかつぶしてはつくしまゐらせて天の下にあるべきものとはなく
なりぬべきはかりうちかつぶしたまふんは子はうくく子あるべきぶべし大
あるべき不孝にはまゐらせまゐらせもがもの事はもはるべんとぞ
たまふいとゆゝしきことにあんず畿内のはたまゐらせものは都近くまゐらせ

哥うみ笛ふくことちからをよはさうはくめ馬よのうち弓矢さ太刀うちかたないさぐらけづりはきものどもりゆびはぐさすがら富士川の戰より遠江三河のうちはぐもまゐらばらもひげのうかく
より兵衛かりちからづよみくハはちつらびやをんそハうざる殿の出陳ゆりくあぐ西ハ中國ばうざう東ハ伊勢尾張のものどもそうれさあらべく平家のいぐわひはくちに出さ勢たちぐ東國の中にも平氏よんうよんをのもさふ〳〵べ〳〵さもはうば平家の領國とうちはくさ〇さたちぐまるびぬべ〳〵いうぐらく〳〵御出陳とはさを申されど右大將はくれうけ給はど教經乃ながくとはさあはれそうとぐもぐみさうこぐし

此人さはりハ八道相國のうちはうんとちくばいさあ又右大將のいくさはかぐのやもはは頃はつくしていさあれ〳〵ハいみしたりのふたうれ三畧より將之所以為威者號令也と
ひ又將無還令とも〳〵はは思るさまはくぐはうぐり
ちくみのかどでとやりれくんよハ號令うろくなりてさその
ちハはかせはうともうぐひめぐ〳〵又平家の領國をはうちは
さくちはふさうぐちくひめぐ〳〵とはれくもいとく
うちまも三畧より香餌之下必有死魚重賞之下必有勇
夫とひ又興師之國務先隆恩とはくなどはうはくぐあり
横田河原の戰はは事みとりて實平のはくるまう

横田河原の戦の中に頼朝を傳きて實平ありとそれを越後の城太郎敵の謀に知りぬいくさに出て戦ふみちかる山中に道にすぐる時いうぐしてよろこんとそる實平ひつくくてくさらにめて山中をゆく時に山乃峯に人をのぐ〳〵をたぎそくく敵のいろふ又道の順逆をみちびきめをれくのちにたりて定めるらひちを〳〵とうぎさせそれちを見合てらるるとくも其ちを〳〵と合きてゆくべ〳〵若敵にうばゐるる乃陳所ハ利地にそなるるとをさきてさきに利地と申ハ左とうげくかくれと見ちに利地と申ハるとゆくり

鎌倉のはそのあたりたるが中に實平ふ〳〵も此事を

頼朝を乃とそそ〳〵ハ軍の法を知りてすぐれるものなれば

そをいくるやうもぞふいとかしこし

同じ戦の事に義経のひくるやう

義経ひと日忠信にいくくく城太郎よりぐるひき人どもふ

非業乃死ありといそる忠信申やうはかるる中ふくハしろをもの

さいつぐやと申をもをすぐく戦に大将のところへいく軍に

法にちくびくそすくもやにくるをもひくはぐれよもきそく

ろくくふ非業の死ありといそれをまばくく人をふんじけりと

義経の此ところへいくくく大将さきろへさくんにハちく

ぐひくをふはそのぐもけくをくのふりをおんじやもひて

たゝにちうこを法くゝあんう

又同じ戦の事ハ弁慶のいくさ

忠信弁慶りこうひやゝゝ城太郎たゝうひりまけさかやゝれ戦

いりぐゝちらんやゝゝ弁慶いくさいあゝ人の軍ハ法ハ

思ふにその見ともれ人を遠く出ゝゝ敵の虚實ハきゝハ

此時義仲りきぐふはたゝものの三千ハすぐきりてゆゑハ信

濃のつゝものの三分一きぐぐゝ一分ハ此縄倉ゝ一分かくり一分ハ

ふはぐきりじ上野のはたゝものハきぐふともかゝゝぐれぐあり

さゝ國ハあゝぐくる敵みくゝものあとけうきりとあはゝ

あるいかへり忠ゝひあゝゝわがゝるものりハうきよれ

はふゝ時ハはたくゝ道ハちぐあぐとくにわが利のあるにハ

法りふゝこうはくとくくとはくゝ時えくすむとりいきかり

みつが如く大風の吹いづるがごとくすぐゝ大とりて小よかハと

いゝあひうぐゝきれ剛戦の法ありといふ義経うえりけて

り義仲柔戦と用る時ハいうとはれるまがるか罰と用ひ

はゝんと申柔能剛ハ制ハといはゝ人のいくるハうゝにハ

えゝいゝる柔ハ大小にりかあればこもなゝはそりあん

義仲大事ハ用ることりくるぬ人なりと申れば義経をぐ

ありぬ

武蔵坊弁慶ハ太刀とりてうちりう矢末りはゝ矢り

ゑかりのことゝ見えたれど謀はみじかくて義経の軍師みぞ
ありけるはゆうしれたる故はあらずしてむしろおさてかひ
ハきびしく取りてみいてまさもぞりしさすれてしとどうし
柔に大小ありといへるはおもしろし三略に柔能制剛
といふ柔ハ徳ありともいひて義仲のかさぶるよりかれバ
剛と制せん柔ハぶるみ大柔なりそれおわりてさん志れるなど
義経ハしへにてゆきおりうえもあふびしてまこしくふとひ
ありせられしもことまりにあん

頼朝主教とかんじて實平み敘とまりし事

壽永二年正月十五日より頼朝主鶴岡八幡の宮よまうでかへさま

北條の家にいつきしれ土肥次郎実平北條時政のもとにいくさの
事どもかたらひあはせらるにハ春のはじめに木曽義仲を討
べしと思ふハいかにとありけれバ實平しばし思ひめぐらしてこれをおもん
ぼかりんしかれども義仲ハすぐれたる強者の三千八騎じ
まこ國ハほく山道さかしくすまひにたてこもられなばその人ども
おろくほろびぬべくゆるやかにしてまさバ平家をおびやかしかたひがたき
べし又平家とほろぼしたりしんてもそれもつめどもむづかし北國
いちごまでつかるがは結れがたし八北りいくさに出したゝひ戦を
むねとしてまつりたゞ義仲の威勢をおさへ人質などいだせうし
りなりて和睦して軍をとゞめしたまひ義仲をして平家に

くせさて後はたゝものの仏おがみたてまつりんこれを關龍逢に
のゝれ謀を行ふべきと申しゝれば頼朝をふくかんじたまぶ神しゝて
せさん我をたすくる人ありとひとく感とたまふ

實平ハ漢の張良に似く遠く思ひたまふことすぐれたまふ
ゝ世に頼朝を乃ひとびとをさめらましゝハ大うと此實平の
いさをなりぬあるべきいみしゝ兵軍師あるれさて又頼朝をも
人乃いさをなりまさるべき水のふかくぶ如くたまふハこれもいと
たる大将なん平家の大将さられたまさいさをもたまふ
ゝいれたまぬとゝ考へたまふことわろべのたちわ仏
ゝべゝぞ

實盛薩摩守に謀申すひ事

平家木曽義仲とうちほろぼさんゝていくさぶたまふ時斎
藤別當実盛副將軍の忠度薩摩守に申ゝるハきゝと國わ源
氏今はたゝ仏なりぬ行まゝば其いのちひ剛ゝて鉾をもゝ
たひゝゝ謀をもてたまふひとゝびあゝと申しゝれど
忠度たまふひとゝびあずその夜高橋判官長綱実盛ぶ陳り
ゆふゝひたまふに問たまふハゝゝ薩摩守殿に申さんゝる謀とて
ハいかゝはるべきとゝみたまふとゝひたまれバ実盛以ゝ今義仲平
氏をうかゝゝ忠のをもゝ仏ぬのゝ求ゝたまふゝ行ゝたまふ
事行たまふゝたまふ侍大將仏ひとゝ源氏へゝ忠り出

されるをかなしびとろこぶむられといへども此の平家の謀ごと
事成いつとして義仲みちくさ共ちからなしとなりぬ
一さび敵に小利をうくるとぶ思へ敵のこころをみめぐく
その時ちからをの先陳をちはげ中ゆうもんかくちうの謀ごと
ひいらをもく大に敵をやぶること数あり〳〵ほんとうにうば
長綱かんじぬ
實盛が此謀をもろこしの義仲深智にる人あり〳〵ほめけう
うべ〳〵ちうの謀る八忠度ぬ実盛が謀ありげよ人の謀ごと
いかに謀ごとをもとんちうもずしてるる人のこころを
用ひどいさたけさのこと〳〵をもこと〳〵く正兵をもく

たるひ敵にもとこの謀ごとをもこと〳〵ふひまけ
られしいとひなる事ぬ行ける大将八智ぬさること〳〵
勇八次にすること兵書乃ひの謀ごとをもこと〳〵ぬ
ちんしちうなこと此人一の答ぬくもひとうこと大将ぬ
しにもこと〳〵の謀ごとをたび知ちゆうにいうのくけ
ちうえあしられどを視卒如愛子故可共俱死と兵書
に以るとけるくたぶへる身のちうひの人ちうにこぶれ
こと世に哥ぬこうこうけこはる人ハむのとうべよりぬ
の道に〳〵こうこうに謀ごと

くるこうこうちの日義仲謀の事

義仲平家とたゝかひ給ふ毎に平氏の法花堂の
けさうとうに陣をとる人あゞ源氏たゝうひのさうぶう
あるべし此山四方けわしくさかしくそびえたる
たうり多なれば此たゝかひ平家より志めしれぬ中にすべ
かるべいさけるに此たゝかひ中くべしらひ
く此いはうり言ふ平家のうちきこゆる中にはさう
うはあぢにうり多ふ平氏うちはかりたゝかうにたやくい
たうり利ふるあと思ひ給ぞり源氏とあはどうふづのきめ人
はたうりめうと見夫いくさ日ふうう夜ふありてはたふ
えびえさせたうりたゝかひ平氏のはたうの紙はたうかうの

だけくはかくしく孫子に善戦者致人而不致於人能
使敵人自至者利之也とかくうたるかくうはたるれ平氏の
大将たち源平むひにひたひ両陣のにひざわづうり三町
ばかうあく源氏たうう遠矢とのこいるハ戦と夜はせんたう
謀なりとハはぐうにまたるる事なるふるにはかう
えびうちくはたうあるまるけつるものふるうちひう
たうひあうびつるハとかくいつあもくう故事ともあはし
三畧にも用兵之要必先察敵情といへるに一にうばや
たうはたくあうびたくぬさうひあくくふふ出くくハたの見ふ

人〻てらう〻しけやう公及てでよハけぐまれるゝ中ちるさぐ
うしろに千丈のぶけけること八とくちるもぐうし〻公
はるゝ〻〻とつゝあれ〻孫子り不知山林險阻沮沢
之形者不能行軍とりくゝハぐりけることぞう〻

平家木曽と戦をわりて後義経のりくゝる事

佐〻木四郎兵衛忠信九郎義経り向申れ平〻木曽殿ゆり
せたとり〻まゝん時り〻平家のかつぐよ謀さうつゝうんやとそ義経
のりくゝく此時ハ平家のまけいくさありうこれども謀にりんよハ
ひく度いろぐ〻義仲越京の國府ゆにけかゝうちくよ
平家ゝの見ける人公出〻〻これ来る公うぐひ〻ゝを多くのに

ゝゝの公松のゝゝとにかく〻みさすこ〻けいゝる公出〻て敵を
ぐ〻〻らひゝるゝのちゆゝよいるめぐちふのつゝちけるもうんを
れぬゝゝのけゝに見公みぐろ〻しんやぐひのてけうちゝを
火とあげうこむさゝに力をゝとゝたの声ゝてせめようせたくうん
り〻ハ木曽のはゝゝのどもハみぐひみぐれてきくぐ〻しゝりう
義経ハたぐ〻くちる人りゝハけうぐろ〻しうと軍の法公
鬼一法眼り〻学びみちけくの秀年ゆもかゝ〻ひあゝ勢
ふぐ〻て大ゝさゝゝをんゝる人ゆり〻うぐたくうんゆう
とかゝくらゝうれゝ此人りハとひつゝゆぐゝゝと源氏と虚
ゆ〻て奇兵公用ひんけゝ公ひくてりていゝゝ六韜

りも因其驚駭者所以一擊斗也といへりすべてたゝかひに
敵ハ驚くべかるべきなり ハ伏兵ハ法なり
いまし人の軍の法なり

太夫坊覺明義仲に申し旗

義仲こゝにたゝかひの府にうつる時太夫坊覺明義仲に申さく
やう平家こゝにたゝかひ戰ふ中なり ハ敵せめくるこゝろ
ひとゝ申げけるに敵とあるべき事ハ軍ぶゝ事ハ
しめくけきばつみやらくちはびてこゝろぶとの人とのがゝ四方より
源氏ばかりてこゝろやこゝろせめくしいたせばゝ平氏ばかりきくばち
ゆさるゝ人さわくこゝもとをゝにたゝかひの法わけくにくと守ゝしめ

たゝかひすべゝ志ゝ世ゝ ひとゝ敵すくばかりべゝと申ゝ
けきばゝ志ゝさえうくゝいこれを覺明ぶ此謀にこゝろて義仲と
を敵くこゝろいくこゝろ

覺明ハいくさ社事ハ法くこゝろえこゝろものゝ
孫子に無慮而易敵者必擒於人といへるやうにかゝるとこゝ
敵どうてハ思ひのかうるひにけりやこゝもあるべうゝ又かゝるの
にこゝろとこゝもにつゝふ謀ハこゝれも孫子に我無形則我專
而敵分我專為一敵分為十是以十攻其一也といへるにかゝる

頼朝主平氏とうつべきこゝろえ社事

頼朝主ひくこゝろいこゝれこゝ大敵とはこゝろがこゝんとこゝに戰社

とかくとするハ将のひがごとなるべし謀をねりてせめなんこそ幸いなれ

しかれバ良将の傳記ありけんこそ平氏がたにとりてハ大敵なりけれ

謀をねりてすべしといひしこそちかくたとへあることにとりてぞ

まことなることと世わかりけり

されバ上兵ハ伐謀といひ又善用兵者屈人之兵而非戦と孫子

にいへれどもしかるにかれこれにてしれたるハ大将なりし事まで

むかしより天の下をさむる世にハしらるる事ぞ

源平拾遺上の巻終